# 女性の仕事、家事、食生活

文・写真　瀧北りえ
太子町男女共同参画推進委員

70年前の太子町の女性と仕事、家事・食文化などについて元いずみ会会長の横山郁子さん(77歳)にお話を伺いました。横山さんは神戸女子短大で家政学を学び、栄養士、中学校教員資格を取得。いずみ会では、地産地消の料理や、太子味噌作りの指導を長年されてきました。

## 仕事・家事のこと

昭和26年頃、この辺りで女性が外で働くと言ったら農業をするか、素麺作りをするかくらいでした。私の母は専業主婦です。昭和18年に結婚して翌年に私が産まれたのですが、その頃は**衣食住なんでも手作り**、専業主婦の母も朝から晩まで働きづめで、大変忙しかったそうです。

**周りに店がなかった**ので、母がミシンでブラウスやスカート、なんでも縫ってくれました。フリルがついたブラウスを作ってもらった時は、喜んで学校に着ていったものです。

私が小学生の頃は、田植えのために**早乙女(さおとめ)**と呼ばれる女性を10人くらいと男性の世話人1人を雇っていました。相生の矢野という地域では田植えが早いので、矢野の田植えが終わり次第来てもらいました。今のように機械は無いけど早乙女達が植えるのは早かったようです。稲刈りも手で刈り取って伊達掛けをします。昼間刈って束にし夜、月の明かりで竹にかけていました。

## 食事・おやつのこと

昭和30年に**初の自動炊飯器**が東芝で売り出され、買いました。田植えで人が多い時には釜で炊いていたようです。大きな桶でちらし寿司なんかも作っていました。味噌汁の味噌は麹をむしろで蒸して手作りしていました。

その頃の普段のおやつは**飴玉**くらい。斑鳩の島津医院があった辺りに飴屋さんがありました。ガラスビンに入っていてとてもきれいでね。お祭りのビー玉みたいな飴です。

田植えの終わりに**柏餅**を皆で食べるのもとても楽しみでした。あんこと砂糖は老原のあんこ屋さんで買いました。その頃は柏の木があちこちの家に植えてあったから葉は木から調達しました。

お祭りといえばこの頃は阿宗神社の祭りや斑鳩寺のお太子さんで木下大サーカスが来ていました。今は有名になったから小さい町には来なくなったけど、当時はよく来ていて、見に行くのがとても楽しみでしたよ。

店がない代わりに、**行商の魚屋さん**が自転車の後ろに魚の入ったトロ箱を載せて来ていました。『ナマズのおばさん』と呼ばれていた人も来ました。大きい竹の駕籠に捌いたナマズを並べて売っていました。それが貴重なたんぱく源だったんです。乾物屋さんは当時もあって鰹節とか昆布を売っていました。

肉屋はなくて、肉と言えば**家で飼っていたニワトリ**を、父が捌いていました。牛や豚を食べるようになったのはだいぶ後です。ヤギを飼っていたこともあります。牛乳屋もなかったので、**ヤギの乳**を飲んでいました。妹2人はしっかり飲んだから大きくなりました。でもヤギの乳は臭うので、私は飲まなかったんです。だから私は大きくなりませんでした(笑)

横山さんは、先代から家と田畑を受け継ぎ、無農薬のお米や野菜を作り、お茶や味噌も手作りされています。そしてこれからは、息子さんが「無農薬のお米や野菜を子ども達に食べさせたい」と引き継いでいかれるそうです。横山家の食生活は安泰ですね。

# 開発先生に聞く太子の医療のおはなし

文・写真　松浦りつ子
前・太子高校校長

開発医院は、地域では「開発さん」と親しみを込めて呼ばれています。まもなく開院100年を迎えます。開発直樹医師(以下、大先生)で三代目。現在の院長である直明医師(若先生)が四代目。

大先生は、現在太子町内の現役最高齢の内科医としてご活躍中。皆さんの中にも、治療でお世話になったり校医さんとして検診していただいたりされた方も多いでしょう。そんな大先生に、太子町の医療の思い出を聞きました。

### ー 昔のことから教えてください

私が若かったころには、東出、斑鳩、東保、糸井にそれぞれ一軒ずつ内科医院がありました。

### ー 戦前は今とは随分違いますよね

健康保険の制度がなかったので、診察や治療をうけると全額自己負担だったため、今ほど気軽に医療にかかるということはありませんでしたね。また、往診が多かったですね。

それは、当時入院施設を持っている医療機関が少なかったことと、健康保険制度が無かったため入院費が非常に高額になること、そして、車を持っている家庭がほとんど無かったので、医療機関に連れていく手段が無かったことが理由だと思います。

私のおじいさん(初代院長)は、自宅で診療所を開いていましたが、往診に出かけることが多く、住み込みの車夫を雇って人力車で往診に出かけていいました。大正時代ごろです。

父(二代目院長)も、初期のころは人力車に乗っていましたが、後に住み込みの運転手付きでダットサンに乗り換えました。当時の父は運転免許を持っていなかったので、夜中の往診にも応じるために住み込みの運転手を雇う必要があったんです。戦争が激しくなるとガソリンが手に入らなくなり、車も木炭車になりました。

父が軍医として召集されたのちは不要になったその自動車を、ダイセルが買い取ってくれました。当時は民間人が使える自動車が本当に少なかったので、随分な距離を走行していた中古車だったんですが、新車で購入した時よりも高い値段で売れましたよ。

### ー そして戦争が終わるんですね

戦後は健康保険の制度が整い、虫垂炎の手術くらいなら病舎を持っていた町医者が自分の所で手術をしていましたし、内科医だった父も眼洗や中耳炎の手当てくらいなら自分の所でしていました。今は、専門に特化した医療になっていますが、昔は一人の医師が診る疾患の幅も広かったですね。

私は昭和42年に医師免許を取得し、46年に開発医院を継ぎました。私は車が好きだったので、県立神戸医科大学(現神戸大学医学部)に在籍している時に、運転免許を取得しました。以後、往診も通勤も自動車に乗っています。現在の場所に医院を開設したのは、昭和50年代の初期です。この頃には往診よりも来院する患者さんのほうが多くなり、駐車場用に敷地を広げたのです。

### ー 今思われることは

戦争を境に、医療環境は大きく変化しました。私の幼い頃は、家業は医師だが田んぼの仕事を手伝うことも当たり前の事でした。今でも、昔の発動機のベルトは上手に掛けられますよ。そういう、時間的にも生活的にも余裕が無かった時代と比べると、現代の人々の生活は格段に豊かで清潔になりましたね。薬も非常に良くなって、本当に良くなりました。

▲ 現在の開発医院

# 70年前の牛のつぶやき

文・版画　重末素子
太子町役場社会福祉課職員

70年後の太子町では、家で飼っている動物に可愛らしい名前をつけると噂に聞きました。でも今の僕に名前は特にないと思うんだ。

僕の住まいは、門の横にある小屋。なぜだか知らないけど僕の住まいをみんなは『馬小屋』と呼んでいます。僕は牛なのにどうしてかな。

そういえば、この前、子どもが池で泳いでて、ヒルにかまれたときはちょっとかわいそうだったな。池で水泳の練習をしててかまれたらしいけど、子供の足についたヒルを思い出すだけでもぞっとするよ。

70年後は動物が服を着ることがあるらしいけど、僕は馬喰のおっちゃんに連れられてこの家に来たときも、今も、ずっと裸。馬喰のおっちゃんはちょっとだけ怖い感じの人だったから、この家に来て、おっちゃんと離れられて良かったなあ。

いっぱい働いてお腹がすいたら、家の人が田んぼの畔に連れて行ってくれるんだよ。この間、いつものように「おいしいなあ」と畔に生えている草を食べていたら、知らない人に怒られて、僕の家の人が謝ってたっけ。畔の持ち主が自分の家の牛に食べさせようと思っていたのに僕が食べちゃったから怒っていたんだって。知らなかった。ごめんなさい。

家は僕の住まいであり、職場。田んぼや畑を耕すときや、大きい荷物を運ぶときなど、動力が必要なときは僕の出番。たまに牛を飼っていない家の農作業にもお手伝いに行くよ。今の時代、助け合わないと暮らしていけないからね。

選挙が何かなんて分からないけど、「立派な人だ」って家の人がいつも話しているおじさんが立候補してて、僕はそのおじさんが乗ってる台車をひっぱる役目。村の入り口に当番の人が立っていて、村をあげて応援しているのをみて、歩きまわった僕もしんどかったけど、選挙に関わる人も大変そうだったな。

今はこうして暮らしているけど、月日が経てば暮らしぶりは変わっていくのかな。僕の役目は機械がやるようになるって物知りの牛が言っていたな。そう思ったらなんかさみしくなってきちゃった。

僕の小屋の掃除を学校に行く前に文句言いながらやってくれている子供の言うことをたまには聞いてやってもいいかな。

# 理容師歴70年

文・写真　岡本功
社会福祉法人あすか会

三色の回転灯。自動ドアが開く。湯気が立ち込め、シャボンの香り。ベンチには順番待ちのお客さん。店内はレトロな雰囲気。ご夫婦が弾けるような笑顔で出迎えて下さる。

私が入店したのは「理容むらた」。大正5年創業の老舗理容店です。現在のお店は昭和2年に建てられました。先客のおじさんの横に腰を下ろそうとすると、おじさんの横に座っていたご主人が黙って立ち上がり「こっちへ座って」と鏡の前のバーバーチェアを勧めて下さる。先客のおじさんは常連さんで、髪を切りに来たのではなく、お話をしに来ただけなんですって。私が髪を切ってもらっている間も、常連さんを交え、みんなで話し、みんなで笑いました。まるで一家団らん。

「理容むらた」はご主人のお父さんが始められました。2代目であるご主人は御年88歳の現役。理容師歴70年だそうです。先代の後を継ぎ、理容師である奥様と2人でお店を切り盛りされています。ご主人の修業時代は、それは厳しく、特に師匠が実の父親だったものですから、その厳しさは半端なかったそうです。失敗したらバリカンで頭をガツンとやられたんですって。「わしらの頃は、基礎を徹底的にたたき込まれたからね」とご主人は、丁寧にカットしながら話して下さいました。

ご主人がハサミを入れると、髪が粉のようになって舞っていきます。熟練の技ですよね。揖龍と言うのは散髪の技術の高い地域で、県の競技会などでも揖龍の理容師が活躍したそうです。同業者で切磋琢磨し、技術を競い合う空気があったんですって。

ご主人は優しく微笑むと私の肩を叩いて下さり、散髪は終了しました。88歳のご主人に肩を叩いて頂くのには恐縮しましたが、これがスッキリ。ご夫婦の笑顔に見送られ店を後にしました。外気が冷たくて頭は冷えましたが、心は温かくなりました。人の心を温かくするのが本当の理容なのかもしれません。